

2026年3月30日 日本テレビ定例会見

《要旨》

1. 営業状況

・放送収入

2月単月タイムセールスは「ミラノ・コルティナ冬季オリンピック」が寄与しまして、前年比107.2%と増収となりました。スポットセールスは「ミラノ・コルティナ冬季オリンピック」や“前年のフジテレビ”による影響を受けて、日本テレビはエリアの前年比より下回りましたが、継続して高いシェアを維持しております。タイムとスポット合わせてのトータル前年比は102.6%となりました。タイムの4月期レギュラーセールスについては前年をやや上回る見込みとなっております。

・放送外収入 (澤専務)

映画ですが、26年度は非常に良いラインナップを揃えることができました。まず、4月10日公開の「名探偵コナン ハイウェイの墮天使」、4月にはもう一作品、日比谷線の脱線事故にまつわる実話をもとにした感動の作品「人はなぜラブレターを書くのか」を控えております。また夏には「キングダム 魂の決戦」、秋には「白鳥とコウモリ」、冬には「SUKIYAKI 上を向いて歩こう」およびアニメの「薬屋のひとりごと」、この他にもいい作品を揃えておりますので26年度は期待していただきたいと思っております。

それからアニメですが、金曜の23時に「FRIDAY ANIME NIGHT(フラアニ)」という枠を全国ネットで放送してまいりましたが、4月からこれを2段積みに拡大いたします。日本テレビのアニメの取り組みを評価していただき、ラインナップも随分増えてまいりましたので、新しい枠も含めまして質量ともに拡大していい作品を届けてまいりたいと思っております。

最後に、ヒトIPと言われている音楽事業でございます。3月に行われた「D.U.N.K. Showcase in K-Arena Yokohama」ですが、3日間Kアリーナを熱狂させました。

そしてこのスピンオフ企画というのを4月4日(土)に埼玉スタジアム2002で行います。「THE GAME CENTER」というタイトルなんですが、サッカーの本田圭佑さんをリーダーとするサッカーのレジェンド選手に対してサッカーに覚えのあるアーティストが集まり、挑戦するという非常にユニークな企画でございます。レジェンドチームにもすごい人たちに集まってくれましたし、一方アーティスト軍団も自分もやりたい、と出場希望が殺到しまして、非常に豪華なメンバーが集まったという楽しみな大会でございます。

2. 質疑

今年度の振り返りと来年度への意気込み

Q.今年度の振り返りと来年度への意気込みを聞かせてください。

A.2025年度、コア視聴率についてはおかげさまで14年連続での3冠を獲得することができました。しかし個人視聴率ではトップを獲ることはできず、2008年以來の無冠ということになりました。地上波のテレビ全体の視聴率のベースを上げつつ2026年度は個人視聴率においてトップを取り戻すことを目指していきたいと思っています。

我々が常に大切にしているのは生活者の皆様に「熱」を伝えることです。年始の「箱根駅伝」では、5区での驚異的な新記録もあった青山学院大学の優勝など102回目となる襷のドラマを伝え、高校サッカーでは鹿児島島の神村学園が圧倒的強さを見せ、夏冬2冠を達成しました。そして3月のWBCでは、侍ジャパンの激闘が生んだ日本中の熱狂を、中継制作や番組を通じて分かち合うことができました。

今後、より制作体制の強化を加速すべく、この4月にはKANAMEL株式会社を完全子会社化いたします。昨年、資本業務提携をして以来、様々な協業を進めてまいりまして、すでに多くのプロジェクトが進行しているところです。強力なパートナーと共にグループのクリエイティブ能力を最大化していきます。「日テレ開国」と謳っておりますが、地上波のみならず、世界に通用するコンテンツ製作とIPの創出を実現するためのものと理解いただければと思います。

2026年度も、サッカーW杯や2回目となる「ダブルインパクト」、ドラマ「俺たちの箱根駅伝」など熱を伝えることができるコンテンツを多くラインナップしておりますので、応援よろしくお願いたします。

4月期改編の狙いについて

Q.今回の4月期改編の狙いを改めて聞かせてください。

A.トップを取れなかった個人視聴率で巻き返しを図らなければならない年です。今年度はタイムテーブルの強化がテーマとなりますので、まず4月期改編で大きな成果を上げていきたいところです。

(岡部取締役)

A.今年の編成戦略は「誰かと見たい、が、一番見たい。」をテーマに掲げております。やはり無料のマスメディアというところもあって、より多くの方に見てもらうというのが地上波テレビの役割だと思っております。そのテーマをもとにした「一緒に、日テレ」というキャンペーン映像を先週からオンエアしております。

4月期改編におきましても、生活者の皆さまに「新しさ」「熱」「親子・家族の時間」をお届けすることで、日本テレビのコンテンツに人が集まり、ファンが増えていくような循環を目指しております。

まずは、4月17日(金)スタートの「金曜ミステリークラブ!!!」です。クラブ主宰は千鳥のノブさん、会員代表として二宮和也さんという魅力あふれるタッグです。世の中に潜むあらゆる「なぜ?」に対し、全世代、ご家族で、リアルタイムで考察を楽しめる参加型バラエティーを目指しております。金曜の夜19時に、ご家族で「ああだこうだ」と言い合いつつ、楽しんでいただける時間になると期待しています。

もうひとつ、改編の目玉としては、土曜 22 時に新しい報道番組を編成いたします。「今、何が起きているのか」「何を信じればいいのか」という声に応え、圧倒的な信頼感を持って「今、見たい」を届ける番組を目指します。詳細については近日中にお伝えいたしますので、ぜひご期待ください。

さらに火曜 24 時台、初回 4 月 7 日放送になりますが、「夜の音 -TOKYO MIDNIGHT MUSIC-」という新しいコンセプトの音楽番組をスタートさせます。これは音楽アーティストと映像のトップクリエイターがタッグを組んだ唯一無二のステージ演出で、毎週ワクワクする感動を提供してまいります。

3 月 29 日の「世界の果てまでイッテ Q」の新企画・世界遺産駅伝をはじめ、それぞれレギュラー番組でも、我々日本テレビが誇るクリエイターの新しい企画や熱というのが「誰かと見たい、が一番見たい。」のテーマを確立させる大きな要素だと思っております。いろいろな番組で新しさと熱を届けていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

中継制作を担った WBC について

Q.WBC の中継制作の成果、受け止めをお願いします。

A.まずは侍ジャパンの監督、コーチ、選手、スタッフの皆さん、そして共に声援を送った日本のプロ野球ファンの皆様、本当にお疲れ様でした。残念ながら連覇というわけにはいきませんでした。素晴らしいプレー、それから激しい戦いの連続で、私も野球の面白さを改めて知ることができました。

今回、ライブ中継の地上波放送が叶わなかったことは残念ではありますが、当社が制作した WBC 中継は MLB の方からも高い評価を得ることができました。また大会期間中の関連番組をいくつか編成しましたけれども、そうした関連番組、それから情報番組や報道番組を通して、多くの生活者の皆様に WBC の感動や興奮をお届けすることができたと思っております。

そして、先週末に開幕した日本のプロ野球に向けて良い流れを作ることができました。NPB の今シーズンのスタートに貢献することも目指しておりましたので、一定の成果を生んだと言えると思っております。

(岡部取締役)

我々が 70 年以上培ってきたプロ野球中継の技術力が、世界中のファンに向かって発信できたこと、そこに貢献できたことは、我々にとって大きな財産となりました。またこの世界的イベントに携わることができた制作スタッフやアナウンサー陣にとっても、非常に大きな経験になっていると思っております。

編成におきましては「ワールドベースボールクラシック詳報」など関連する番組を 9 枠放送しましたが、その多くの枠におきまして、個人視聴率で横並びトップとなりました。国民的関心事である WBC、そして侍ジャパンの戦いぶりを「より詳しく、より深く見たい」という視聴者の皆様のニーズに、スピード感を持って可能な限りお応えできたのではないかと考えております。

先日、Netflix さんからリリースがあり、WBC47 試合の視聴人数が 3,140 万人だったと発表されました。2023 年開催の時にビデオリサーチさんが日本戦 7 試合のリアルタイム視聴人数は推計で 9,446 万人と発表したというのが、今のところ公式に出ている数字の 2 つだと思っております。やはり、全世代、もしくはファンでいうとコア層ではなくライト層、そういう世代にリーチする地上波の役割を再認識した機会でもありました。今回の経験を日本のプロ野球という文化の成長にどう寄与させていくか、これから一生懸命考えなければいけない宿題、課題だと思

いますが、まずは3月27日金曜日に開幕した巨人阪神戦で生かすことができました。WBCで初めて見た方もいると思うんですけども、東京ドーム内のドローンカメラですとか、ピッチャーやホームランを打った時に生還するランナーを非常に近くで撮っていたカメラ、ステディカムと言いますが、これまでのプロ野球中継の歴史の中ではなかなか突破できない演出方法だったのが、WBC中継とMLB主催というところで突破し、しっかり活かして放送につながられました。今後も野球及びスポーツ文化の発展に微力ながら貢献していきたいと思います。

Q. 視聴者からの声はどのようなものがありましたか。

A. やはり地上波で放送しないのはなぜかと、放送してほしいというご要望の声が圧倒的に多かったと思います。また、報道番組や情報番組で伝えたことについて感謝する声があったことは私も確認をしています。

Q. 次回大会は、中継を受託する形か、自分たちで中継する形か、どちらですか。

A. 次の大会のスケジュールはまだ明確にはなっていないですし、次のことは主催者がどう考えるかというところからスタートするものだと思っています。

Q. 福田社長個人の願望としては放送したいですか。

A. もちろんです。

Q. 地上波でWBCの中継を実現するための考えがあれば教えてください。

A. WBCを地上波で中継をしたい、それが日本テレビであれば嬉しいということがまず第一。ただ、それを実現させるために何が必要なのかについては、これからの研究であり、検討であり、決心であるのかなと思っています。潤沢に制作費があれば高い放送権利金でも購入することはできますけれども、そういう経済的な事情が第一にあると思いますし、今後もその辺をどのように解決していくか考えなければいけないのかなと。当然、日本テレビだけの問題ではないと思っています。

BS4Kについて

Q. BS4Kを終了する見通しか、お考えをお聞かせください。

A. 現在放送しているBS4Kの免許についてはBS日本として新しく申請しないとの報告を受けています。BS4K放送は、事業性においてかなり頑張ってきたんですが、難しい状況にあります。ただ、映画や配信の場では視聴者ニーズや事業性について可能性がないわけではないと思いますので、これを図りつつ、今後も継続して制作環境を整えていきたいと思っています。4K番組を制作する上でのノウハウは蓄積できているので、この秋からWOWOWさんの4Kプラットフォームで行う4Kコンテンツの配信にも活かしていけるのではないかと考えています。

Q. BS日本の免許の最終日はいつになりますか。

A. 免許自体は2027年1月23日までですけども、その日が境になるかどうかは現時点ではわかりません。

Q. BS日本が免許申請をしないと決めたタイミング、経緯などの詳細を教えてください。

A. どういうタイミングで決まってきたかということですが、決めたのはBS日本になります。3月23日の日本テレビホールディングスの常勤取締役会でBS日本の社長である粕谷賢之から

報告を受けており、報告を受けてそれを了承しているという状況です。特に議論をしているということではございません。

マスメディア集中排除原則の緩和について

Q.総務省で同一放送地域での一局二波の検討がされていますが、考えなど聞かせてください。
A.系列局にとっては大きなニュースだと思いますが、日本テレビとして特に積極的に緩和をしてほしいということをお願いしているわけでもありません。ただローカルにとっての経営の選択肢が増えるわけですから、実現したときには歓迎できることではないかなと考えております。ただ一局二波を許容する制度改正が行われたからといって実際にその制度を使うかどうかについては我々自身で判断しなければいけないことであると、そのように思っております。

松本人志さんの CM・番組復帰について

Q.「ダウタウンのガキの使いやあらへんで！」で松本さんが登場する CM が流れていますが番組に復帰する予定はありますか。

(岡部取締役)

A.現段階で決まっていることはございません。

Q.CMを流したことによる反響は？

(柴田副社長)

A.視聴者の方からはどうして流れているのかという声もあれば、久しぶりに顔を見られて嬉しかったという声もありました。

Q.CM を放送するに至った経緯を教えてください。

(柴田副社長)

A.CM のキャスティングは原則として、スポンサーさんがご自分たちのマーケティング戦略や主張などをもとに制作されていますので、基本はそれを尊重したいと思っています。今回、高須クリニックさんから松本さんを一部起用した CM を流したいというご要望を承りまして、念のため吉本興業さんに確認をしました。裁判も終結しているなど、いろいろ事実関係を確認させていただいた上で、現時点で CM の放送を拒絶する事由はないと判断し、放送した次第です。

プロ野球開幕について

Q.プロ野球が開幕しましたが巨人軍について、今シーズンへの期待、激励をお願いします。

A.岡本和真選手が MLB に挑戦するというニュースに始まって、怪我をしている選手の話題などかなり後ろ向きな情報が先に出てきましたからとても心配していたんですが、ここに来てオープン戦の好調、それから新戦力が躍動して早速いい結果を残していて、若い力・新しい力がチームに熱を注ぎ込んでいると感じているのは多分私だけじゃないと思います。負け越したといっ

でもまだ一つだけです。この後安定した力を発揮してくれるんじゃないかなと大きく期待を寄せております。頑張ってもらいたいと思います。

(岡部取締役)

開幕戦を東京ドームで観戦しました。今年のジャイアンツはどうなるんだろうという心配があった中で、竹丸和幸選手のテンポのいいピッチング、移籍した松本剛選手、新加入のダルバック選手他、若い力、新生ジャイアンツってというのが個人的にはものすごく楽しみになりました。この後どのように巨人が今シーズン戦っていくのが注目しております。

「笑点」について

Q. 番組開始から5月で60年となる「笑点」という番組の位置づけ、評価など教えてください。
A. 10年前、私は制作の責任者でしたが、その時にも「もう半世紀もやってるんだ！」と思いました。あの時、歌丸師匠に勇退を決めていただいて、それをきっかけに徐々に新しいメンバーになり、少しずつ新しい「笑点」に変わっていき、あっという間の10年でしたけれども、この先の10年20年ももちろん続けていく。やめる理由はありませんので続けていくためにはこの10年取り組んできたようなことが繰り返し行われるのかなとは思っています。

(岡部取締役)

今年の5月に60年で還暦。今、還暦は通過点だったりする中で、「笑点」もこの還暦を超えて、さらに成長し進化していくと思います。今後とも60歳になる「笑点」をぜひ応援していただければと思います。

岩田絵里奈アナウンサー退社について

Q. 3月をもって退社する岩田アナウンサーへの思いなど聞かせてください。
A. 当社のエースアナウンサーのうちの一人として、情報番組から特にバラエティー番組での活躍が記憶に残っている方が多いと思うのですが、本当に頑張ってくれました。正直残念ではありますが、彼女が自分で決めた新しいスタートの門出を今まさに迎えているので、私としても日本テレビとしても今後の彼女について応援をしていきたいなと思っています。頑張ってもらいたいと思っています。

Q. 今後、日本テレビの番組に起用される予定はありますか。

(岡部取締役)

A. 辞めるからといってこれで縁が切れるわけではなく逆にプロのアナウンサーとしてのお付き合いというのは今後もいろんな形で続いていくと思います。「世界まる見え！テレビ特捜部」は出演を継続いたしますので、引き続き応援していただければと思います。

週刊誌報道について

Q.女性プロデューサーがアイドルを呼び出し飲み会を開いたことが原因で人事異動されたという週刊誌の記事があったが事実ですか。

A.そういう事実はありません。

(了)

福田 博之 代表取締役社長執行役員

柴田 岳 取締役副社長執行役員

澤 桂一 取締役専務執行役員

岡部 智洋 取締役執行役員

※回答者名のないものは、福田社長による回答です。